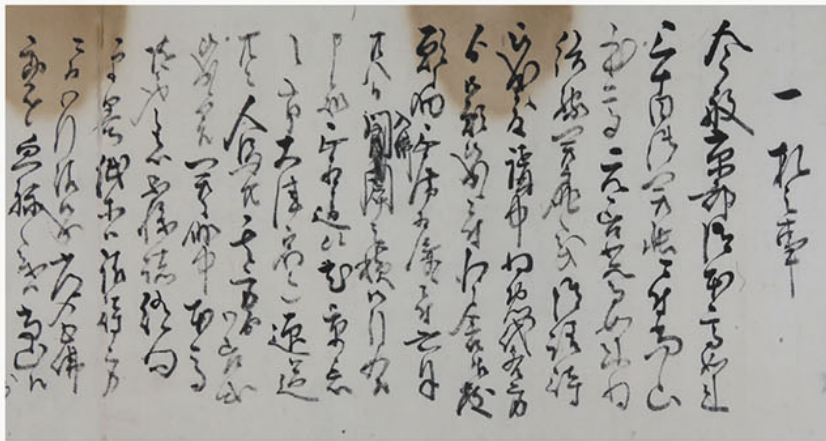




— 史料紹介 — 元善光寺(如来寺)の出開帳 でかいちょう

よく知られているように、座光寺にある元善光寺は、推古天皇11(603)年に本多善光によって難波から背負われてきた如来が、皇極天皇2(643)年に水内郡川中島芋井郷(後の善光寺)へ移されるまで安置されていた場所に創建された、との由緒をもっています(『伊那史料叢書7 伊那郡神社仏閣記』1922年)。元善光寺は江戸時代には如来寺と呼ばれていましたが、江戸時代後半の19世紀になると、如来寺はこうした由緒に依拠して、江戸・京都・大坂や飛騨高山といった諸国の寺院に赴き、本尊元善光寺如来などの開帳を行いました。このような他所で行う開帳を「出開帳」といいます。座光寺村の庄屋を務めた今村家の史料群(古瀬今村家文書)には、如来寺の出開帳に関わる史料が、書状を中心に残されています。



文政5年5月19日「一札之事」(古瀬今村家文書)
 座光寺(如来寺)役人窪田伝右衛門と誓願寺講中の間で出開帳の諸条件を取り決めた一札の控え

文政5(1822)年には、京都にある浄土宗西山深草派総本山の誓願寺で出開帳が行われました。これは誓願寺から招かれて実施されたものですが、その実現には多くの人々が携わっていました。なかでも「寺役人」窪田伝右衛門と「役僧」清浄光院の2人が注目されます。

窪田伝右衛門は、飯田城下の本町二丁目の人で、荒町にあった、伊那郡の幕領11ヶ村を預かる千村平右衛門の役所(荒町役所)に出入りする郷宿を営んでいました。郷宿は、役所へ出向く百姓を宿泊させるほか、

役所と村々の間にたって支配を円滑に進めるための多様な業務を担う存在です。この誓願寺での出開帳では、如来寺の寺役人として、誓願寺との間で開帳期間や条件などを取り決めるなど、出開帳全体を取り仕切る立場にあったようです。郷宿を務めることを通して獲得した知識や経験があったからこそ、出開帳に関わることができたのではないのでしょうか。

清浄光院は、その出自などはまったく不明ですが、如来寺や座光寺村・飯田に所縁のある人ではなかったようです。彼はこの出開帳のために金30両もの大金で如来寺に雇われ、誓願寺とともに、京都町奉行所への手続きなどを担っていました。さらに興味深いのは、彼が公家(羽林家)の清水谷家とつながりをもっていたことです。こうした清水谷家をはじめとする広い人脈を京都で有していたことが、清浄光院の活動を可能にしたと思われます。あるいは、他の寺社の開帳に携わった経験ももちあわせていたかもしれません。

窪田伝右衛門も清浄光院も、如来寺専属の役人・役僧ではありません。彼らを如来寺が頼ったのは、如来寺単独で諸国の寺社との間に関係を築き、出開帳を行うことが難しかったからだと考えられます。出開帳を実現するためには、窪田伝右衛門や清浄光院のような、独自の知識・経験・人脈をもつ人たちの仲介が必要だったのです。

(本文の出典:羽田真也「出開帳を請け負う人びと —信州伊那郡座光寺村如来寺の事例から—」『三都科研報告書 日本近世の都市社会と史料』2020年)

(研究員 羽田真也)

史料から読む 「王子製紙バラ狩り騒動」

明治8年、渋沢栄一は抄紙会社と呼ばれる、日本初の製紙会社を設立しました。これはのちに王子製紙と改称し、日本屈指の製紙会社へ成長します。明治20年代、王子製紙は原料となる木材を求め、遠山地域の豊かな森林資源に注目しました。明治28年に王子製紙は遠山の和田村などの山林伐採権を購入し、静岡県磐田郡に工場を設立しました。遠山で伐採した木材を遠山川に流し、平岡村の満島（現在の天龍村）で筏に組んでから天竜川本流を通して静岡県の工場まで運びこみ生産を行っていたようです。大正期に入って王子製紙が撤退するまでに、伐採された遠山の森林の面積は46万㎡に達したといわれています。王子製紙の進出は、遠山地域に莫大な富をもたらす一方で、豊かな森林が破壊されるなど、功罪相半ばするものであったと評価されています。

王子製紙という企業の進出は、遠山、そして下伊那の社会全体に様々な影響を及ぼしたと考えられます。その一つが、「王子製紙バラ狩り騒動」です。王子製紙は、手間と経費を省くため、平岡村で木材を筏に組むことを止め、天竜川本流に木材を1本ずつ「バラ」で流し運送しよう（「狩り」）と明治30年代には計画するようになりました。これに対し、天竜川の舟運の重要な担い手でもあった平岡村の人々が中心となり下伊那全域を巻き込んで起こした、激しい抵抗運動のことを言います。

飯田市歴史研究所で所蔵公開されている「近現代ファイル」には、その当時の様子を示す史料である陳情書が収録されていますので紹介します。明治37年1月28日に、平岡村をはじめ下伊那郡の1町27村の町村長たちは連名で、長野県に対して「木材放流許可取消陳情書」を提出します。陳情の中では、当時まだ鉄道が通っていない下伊那にとって輸送路としての天竜川は非常に重要であり、王子製紙が木材をバラで放流したら船や筏の転覆などが増加して交通が阻害されてしまうと訴え、中止を働きかけています。これらの働きかけにより、王子製紙は木材をバラで放流することを断念したようです。この事件は、中央の巨大企業の進出に直面して、それに翻弄されるだけでなく、団結して自分たちの利益を守ろうとした当時の下伊那の人々の姿をよく示しているものといえるでしょう。この事件以外にも、王子製紙の進出は、下伊那に大きな影響を及ぼしています。山林伐採に従事する人々の食糧や日用品は、飯田などから調達されたと考えられており、飯田の物価もそれに応じて変動することもあったようです。飯田・下伊那の近代を理解する上で、非常に大切なテーマの一つですので、今後も検討を進めたいと思います。

(研究員 太田仙一)

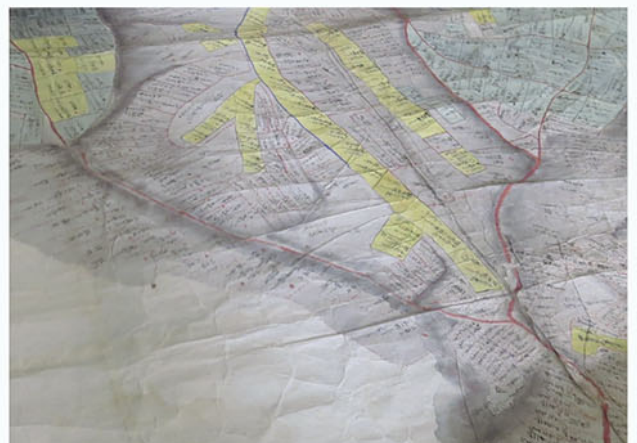
龍江支所文書調査報告

龍江自治振興センター・龍江公民館の協力のもと、2019・20年度に、主に旧龍江村役場時代の文書(支所文書)の調査・整理を実施しました。2019年度にはおよそ2500点、2020年度にはおよそ1900点の文書を整理し、調査は無事に一段落しました。

龍江地区は、飯田市南部・天竜川東岸に位置し、1964年に飯田市と合併した龍江村にあたります。龍江村は明治8(1875)年に今田村と安戸村等7か村が合併し成立しました。今回調査した文書には、近現代の龍江村の様子を示す貴重な史料が多数残されています。明治10年代から昭和期にはいるまでの各年の村会の記録や、村の姿を示す地図・公函、昭和36(1961)年に発生した三六災害に代表される水害への対応を記録した書類など、龍江に暮らした人々の生活が様々な角度から記録されています。龍江の歴史を記録する代表的な書籍としては、1997年に刊行された『龍江村誌』があげられます。その刊行のために多くの史料が収集され、それが現在も村誌資料として残されています。今回の調査ではそれもあわせて整理しました。その中には、江戸時代の年貢関係の記録や天竜川の利用をめぐる文書なども残っています。龍江支所文書は、龍江、そして飯田・下伊那の歴史を理解する上で非常に重要な史料になるはずです。

この調査をもって、飯田市歴史研究所が取り組んできた、自治振興センターなどに所蔵される支所文書の調査・整理はひとまず完了します。今後は、それに基づいて各地域の研究などを進展させ、地域の皆さんに還元していくことが重要な課題となっていきます。

(研究員 太田仙一)



龍江村の絵図

飯田から見た明治4年のオーロラ

池田勇太 (山口大学准教授/歴史研究所客員研究員)

飯田を離れて山口に来てから8年が経ちました。初めて山口に来たときは、伊那谷のように高く美しい山々がないことが残念でしたが、かわりに空が広いと思ったことを覚えています。山が高くないぶん日没の時間が長く、夕景が美しいのも山口のいいところです。

さて、真夜中に山の向こうの空が赤くなるのは、大きな火災と思いがちです。昭和20年(1945)3月には、松本の浅間温泉から名古屋の空襲の「炎々たる状況」が見えたそうですが(『胡桃澤盛日記』6巻)、火災でない場合もあるようです。

いまから約150年前、明治4年の12月26日(1872年2月4日)深夜、飯田から西北の空が赤く染まったことを、旧飯田藩士の熊谷一見が記録していました。

「一、同月廿六日、夜九時半時頃より七時半時過迄、西北の方一円紅色の天中に白気紫気^{いず}顕れ、何れにも西北の方大火にても有^{これあるや}之哉^{など}杯種々^{そののち}噂。其後追々承り候得は大火にても無^{これなく}之、何国迄も同じ立春寒明^{いずくまで}右様に候。天変明年の処如何に相成哉、区々^い噂耳。」(「耳目抄」29、飯田市美術博物館所蔵)

深夜12時頃から午前4時過ぎくらいまで見たその空焼けは、緯度の低い本州では珍しいオーロラの記録です。

この日のオーロラは広い範囲で確認され、福岡や下関でも北方の洋中に「火光天を焦し、凄じき気立」が見えて、火事だと騒いだようです。大阪でも大火と勘違いをして騒ぎとなり、池田あたりではないかと噂し、その後追々と丹波といい、若狭と変わって、ついに北洋中の天火であると定まったといえます(『新修福岡市史』資料編近現代1、596～597頁)。いまでこそ私たちを楽しませる天体ショーですが、かつては凶兆と怖れられました。この明治4年は廃藩置県で藩がなくなり、それまでの秩序が崩壊してしまった年でしたから、大寒があける立春の日の天変がいかに人々の不安をかき立てたか、わずかな記録から想像できます。

※読みやすさを考えて簡略に書きましたが、典拠を詳しく書くと以下の通りです。

- ・「胡桃澤盛日記」刊行会編『胡桃澤盛日記』6(「胡桃澤盛日記」刊行会、2013年)、101頁
- ・熊谷一見「耳目抄」29(飯田市歴史研究所近現代ファイル46-7「熊谷操家文書」、原本は飯田市美術博物館所蔵)
- ・「維新雑誌」13・14(福岡市史編集委員会編『新修福岡市史』資料編近現代1維新見聞記、福岡市、2012年)、596～597頁

地域史講座

史料で読む川路の歴史

開催日：**3月6日**±
 時間：14:00～16:00
 会場：川路公民館
 定員：40名 ※申込み締切 3月5日(金)

飯田市歴史研究所では、近年の調査成果を踏まえ、川路の歴史を考える書籍『史料で読む飯田・下伊那の歴史2 川路のあゆみ 近世から近代へ』を刊行します。講座では、その中から近代の養蚕業や地図作成について、史料を読み取りながら川路の姿を考えます。

報告者：田中雅孝(特任研究員)・・・大正期「育蚕品評会」にみる村落の共同と自治
 報告者：福村任生(研究員)・・・明治二十年代の地図調製
 報告者：太田仙一(研究員)・・・蚕糸業組合法の制定と川路
 報告者：羽田真也(研究員)・・・刊行に寄せて

遠山谷の歴史的景観 消えゆく景観と引き継がれる景観

開催日：**3月13日**±
 時間：14:00～16:00
 会場：南信濃学習交流センター
 (南信濃和田1099-2)
 定員：40名 ※申込み締切 3月10日(水)

遠山谷の人々の暮らしは、険しい斜面や谷筋の街道と共にあり、その中で独自の景観が形成されてきました。本講座では近年の調査をふまえて、変遷する景観について考えます。

報告者：樋口貴彦さん
 (東洋大学助教・歴史研究所調査研究員)
 講師：佐々木葉^{よう}さん(早稲田大学教授)

各講座定員40名程度とさせていただきます。申込み締切までにお電話でお申込みください。
 (電話 0265-53-4670) ※日曜日・月曜日・祝日は休所
※新型コロナウイルス感染状況により、延期または中止する場合があります。

荒天のため延期した講座を開催します

飯田アカデミア2020第91講座

通勤電車の社会史

—東京の通勤はなぜ「痛勤」なのか—

たかしま しゅういち

講師

高嶋修一さん

(青山学院大学経済学部教授)

会場

①飯田市役所 C棟3階会議室

②ご自宅のパソコン

受講料

500円 ※高校生以下無料

※1講義のみでもご参加いただけます。

2月27日(土)

第1講 13:30~15:00

東京の近代化と都市交通機関の登場

第2講 15:20~16:50

市街電車の登場と限界

☆飯田アカデミアは、歴史学における第一線の研究者に、最新の研究成果をわかりやすく紹介していただくものです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のためweb会議システムを利用したオンライン(講師が遠隔から講義する講座)での開催とさせていただきます。今回は①会場での受講(定員40名、機材等はこちらで準備します。)②ご自宅等のパソコンから受講の2通りの受講が可能です。

いずれも、2月19日(金)までにお電話でお申込みください。その際に受講方法等についてご案内させていただきます。(0265-53-4670) ※日曜日・月曜日・祝日は休所

講師より

日本の大都市では通勤が「痛勤」と言われるほどの大混雑が日常化しています。1日2時間を通勤に費やすとして12年勤めれば通勤時間はまる1年になり、一般的なサラリーマンは定年までに約3年を満員電車のなかで過ごす計算になります。これは18世紀に大西洋を渡った奴隷船よりも人口密度が高い空間で、当時の奴隷よりもはるかに長い時間を生きていることになります。なぜこのようなことになったのでしょうか。東京では20世紀初頭に市街電車が、続いて「高速鉄道」(省線電車や地下鉄、郊外私鉄)が登場し、やがてそれらは都市計画のなかに位置づけられました。しかし、設備投資は必ずしも十分に行われず、その不足は人びとの行動様式や物の考え方のコントロールで補われることになりました。それがよく表れていたのが戦時中の交通調整でしたが、基本的な特質は戦後の高度成長期にも引き継がれました。これは、近現代日本社会の一つの特質であったと言えます。

2月28日(日)

第3講 10:00~11:30

「高速鉄道」の登場

第4講 13:00~14:30

都市計画と交通調整

定例研究会

松下千尋日記に読む
農村青年の自己形成

開催日: 3月27日(土)

報告者: 田中雅孝(特任研究員)

時間: 14:00~16:00

会場: 鼎公民館

☆定例研究会は、当研究所の研究員が研究報告する場です。

※聴講ご希望の方は歴史研究所までお電話ください

歴研ゼミ&ワークショップ2月・3月の予定

会場: 歴史研究所 研修室 ※近世史ゼミ: 伊賀良公民館にて開催します。

※満洲移民研究ゼミ: 2月は飯田市公民館 3月は鼎公民館にて開催します。

受講生募集!

建築史ゼミ

担当: 福村任生(研究員)

2月19日/3月19日

(第3金曜日) 19:00~21:00

近世史ゼミ

担当: 羽田真也(研究員)

2月10日・24日/3月10日・24日

(第2・第4水曜日) 18:30~20:30

近現代史ゼミ

担当: 田中雅孝(特任研究員)

2月13日

(第2・第4土曜日) 10:00~11:40

思想史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場

2月3日・17日/3月3日・17日

(第1・第3水曜日) 19:00~21:00

満洲移民研究ゼミ

担当: 本島和人さん(調査研究員)

齊藤俊江さん(調査研究員)

第112回 2月6日/第113回 3月6日

(第1土曜日) 10:00~11:40

地域史ゼミ

担当: 太田仙一(研究員)

2月12日/3月12日

(第2金曜日) 18:30~20:30

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL: 0265-53-4670

各種講座、アカデミア、ゼミについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳などの症状のある方やマスクを着用されない方の受講はご遠慮ください。また、今後の感染状況により、中止または延期をする場合がありますのであらかじめご了承ください。

開所時間: 午前9時~午後5時 休所日: 日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日